

外交関係樹立50周年 —「モンゴルと私」の個人史から

清水 武 則

私の人生はモンゴルという国と切り離せない。モンゴルの日本大使館に4回勤務し、モンゴルの社会主義時代から民主化を経て今日の変化を見てきた。同時に日本とモンゴルの、この間の関係発展に自分なりに貢献することができた。三等理事官から始めて最後は特命全権大使を務めた。私は、イギリスでのモンゴル語研修に始まり、カナダやアメリカの日本大使館で勤務をする機会を得た他、日本でも必ずしもモンゴルとは関係のない仕事もたくさんこなしてきた。条約だったり、領事だったり、広報や文化だったり、国連だったりユネスコだったりしたが、それらの経験が、私がモンゴルという国と向き合って仕事をする上でとても役にたった。また、自分が「モンゴル」という専門をもっていたおかげで、いろいろな所で素晴らしい出会いに恵まれた。そういう意味で、モンゴルには感謝あるのみである。外交関係樹立50周年の機会に簡単に「モンゴルと私」を振り返ってみたい。

1. モンゴルとの出会い

私が日本の外務省のモンゴルの専門官になったきっかけは偶然から始まる。当時語学研修性試験と呼ばれた専門家になる試験（現在の外務省専門職試験）に合格して研修語学が伝達された際に、人事課の幹部の人から「君はモンゴル語だから」と言われた。思いもしない言語になったことに不満の表明に行った。すると、「君は希望研修語学の第5番目にモンゴル語を選んでいるね。しかも君の故郷の九重(このえ)はモンゴルと似ている。君はきっと良いモンゴルの専門家に成れる。」と言われ、逆に自分が驚いてしまった。私は、外国語の受験は中国語だったから、留学研修の第一志望は中国語、第二志望は韓国語、第三志望はインドネシア語だった。そこまでは覚えていたが、第四、第五志望の言語が何だったかを全く覚えていなかった。それでも、外務省を辞退せずにモンゴル行きを受けたのは、留学の1年目で英国か米国を選べたからだ。九州の山奥で育ったので、欧米の大学に留学できるというのは何語であっても十二分に魅力的であった。結果として、イギリスにモンゴル語の勉強に行き、1977年以来4回モンゴルに勤務し、モンゴルの発展とともに自分自身も成長していった。今はモンゴル語の選択で良かったとつくづく思うが、最近では、これは、偶然の選択ではなく必然だったのではないかと思っている。

私の父親は戦争が終わる前年の1944年の11月に高校を卒業するや召集されて満州国に軍人として配属になった。関東軍と聞くとプロの軍人だと思いがちだが、戦争末期は父のような素人軍人の集団になっていた。父は、私が14歳の時に亡くなったが、その原因は、シベリア抑留時代に患っていた肝臓病が原因だった。父はよほどつらい思いをしたのか戦争や抑留については全く何も語らないままだった。私が大使になって3年目だったか、そんな話をノモンハン事件で亡くなった日本兵の遺骨収集にやってきた厚生労働省の方に話したことがある。シベリア抑留者は日本に帰国した時に、どこで何をしていたか聞き取り調査をしているので、必ず情報がある、と言われた。調べてもらうと驚くことに、父はモンゴルのすぐ南のハイラルで勤務していたのだ。そして、父の所属した歩兵連隊も判明した。175人いた連隊だが、終戦前後の満州国へのソ連軍の侵攻でこのうち150人が戦死していて、父親はわずかな生き残りの一人だった。ソ連軍の侵攻には、ソ連と相互援助条約を結んだモンゴル軍も参加したから、父親はモンゴル軍とも戦ったと思われる。戦争について全く何も言い残さず去っていった父親だが、私は、63才になって初めて父親の過去を知り、モンゴルをやるのは自分の運命だったと悟った。

突然兵士に仕立てられ、異国の地の任務につき、ソ連・モンゴル連合軍と戦い、捕虜として3年以上も極寒のシベリアで酷使され、帰国しても、その時の病気が原因で亡くなってしまった。さぞかし無念な人生であったに違いない。戦争というものがなければ、世の中が平和であれば、きっと長生きをして楽しく暮らしたに違いない。そう考えた時、自分が外交官になり、かつて戦った国に赴任し、日本との友好関係を築く仕事についたということは、これは、父親の思いではなかったかと考えている。

2. 最初のモンゴル勤務の思い出

1年間イギリスのリーズ大学でのモンゴル語の授業を終え1977年に初めてモンゴルの地を踏んだ。イギリスの留学は楽しかった。著名な中国・モンゴル学者のオーエン・ラティモア先生や内モンゴル出身のウルグンゲ・オノン先生の下で勉強できた。生活は、韓国、シンガポール、オマーン、モーリシャスなどの学生たちとの寮生活。異文化の国の人たちとの交流で、偏見をもたず人としてお付き合いをすることを学んだ。モンゴルでは、私自身が外務省から派遣されたことが影響したと思うがモンゴル国立大学ではベトナムの留学生とだけの特別クラスであった。担当はミシグ先生とジャルガル先生。二人とも大変親切にしてくれた。生のモンゴル語を学ぶ機会は限られていたので、国立大学の学生寮にいる日本人留学生を尋ねて、そこに集まる日本語学科のモンゴル人学生に話しかけ、モンゴル語を使う努力をしたが、正直社会主義化下の公安警察の目が厳しい社会ではモンゴル人との自由な交流はできず、私のモンゴル語もたいして上達しなかったと思う。当時日本大使館

は、なんと、食料、特に魚や肉をスウェーデンのストックホルムまで買い出しに行っていた。三つのことが忘れられない。一つは、モンゴルにいる間中、頭ががらがん割れるような痛む片頭痛に悩まされていたのが、モンゴルを離れてしばらくすると痛みがなくなっていたこと、二つ目は、帰路モスクワからの飛行機の座席が誰か偉いさんがモンゴルに行くというのでキャンセルされており、モスクワで4日間も延泊したが、公使の家の大きな冷蔵庫に保管してもらって食料を持ち帰ることができたこと、三つ目は、帰路、隣の席にアメリカに住んでいるというダライラマのお兄さんが座って親しく話しかけてくれたことだ。

1970年代は中ソ対立が激しく、当然ソ連側についているモンゴルと中国との関係も悪く中国に買い出しに行くという選択肢は未だなかった。公安警察の取り締まりが厳しい時代だったから、一般のモンゴル人も日本人には簡単には話しかけてこなかった。そんな中で、モンゴル・日本文化交流協会の幹部だった画家のツルテムさんやヤダムスレンさんとは比較的交流ができた。特に、ヤダムスレンさんの息子の画家ウルジネさんは家によく呼んでくれた。また、政治局員であったモロムジャムツの子息バターは良く家に遊びに来てくれた。ある一般の青年も良く深夜遊びにきていたが、公安に見つかって地方に飛ばされてしまった。そんな限られた人との交流と物不足の厳しい時代であった。当時は、ごく少ない外国の商品がドルショップというところで売られていた。そういう時代であったが、とりたてて貧富の格差もない、今思うと良き懐かしき時代である。親切にしてくれた日本語学科の学生や先生たち、そしてごく少数の体制を恐れなかったモンゴル人のおかげで、社会主義体制を憎むことはあっても、モンゴルの人を嫌いになることはなかった。

初めての大使館勤務には、外務省からフレルバートルさんが通訳として派遣されていた。体制の違う国の外務省の職員を日本は大使館の現地職員として受け入れていた。その時の日本大使は秋山大使だった。フレルさんは、その後モンゴル外務省の中で出世を重ね、2回も駐日大使を務めた。国益を考え、常にアイデアを持ち、積極的に日本の政界や官界へ働きかけを行った優れたプロフェッショナルな外交官だった。秋山大使といえば、私の結婚に際しては、頼まれ仲人をしていただいた。若い時に父親を亡くした私には、親父さんのような存在だったが、1977年にロンドンから転勤でウランバートルに到着し挨拶に行った時の言葉は「大使館に寄り付かないでしっかりモンゴル語を勉強しなさい」だった。プロになりなさい、という言葉と受け止めた。当時の生活は厳しかったので、私はなかなか秋山大使の言葉を実行できなかった。

3. 民主化時代勤務の思い出

1989年の3月にカナダからモンゴルに転勤になった。日本とモンゴルの関係は、1987年のドゥゲルスレン外相の訪日以来動き出していた。着任するやダルハンで行われたソ連軍

の撤退式を見ることができた。ロシアのトップは国家安全保障会議の事務局長という人で英語がとても上手だった。新華社の記者も来ていて、言葉が分からないらしくて私が通訳をしてあげた。すでに、このころから、ソ連とモンゴルの関係には大きな転換の兆しがあったが、この年の12月の青年文化会館前での最初の非合法集會に始まり、翌年からデモの毎日、情報収集に明け暮れる毎日だった。日本からも、北京駐在の記者が取材で沢山訪れた。外務省の報道局長が、反政府の民主化グループの取材アレンジもしてくれたが、そんなことは中国ではあり得ないので、記者さんたちはみな感動していた。私もスフバートル広場の大集會の取材をしたことがあるが、マイナス二十数度の寒さだったが、若者たちの熱意が氷を解かすように、モンゴルが変革の方向に進んでいくのを見て、ようやく、この寒いウランバートルに春が来る、と自分のことのように嬉しかったことを思い出す。そんな中で2月下旬にソドノム閣僚會議議長（首相）の訪日だった。後日、私が彼に早々に総辭職を決めた理由を尋ねたのに対して、「若者の主張には一理ある。モンゴルは小さい人口の国だ。内部の対立は國家を滅ぼす。今は、この國の將來を若者たちに託するのが正しい」と答えてくれた。この言葉こそ、本当の愛國主義者の言葉であると感動し、私は、そのような立派な方が、モンゴル日本友好關係促進協會の會長になってくれたことを誇りに思っている。

ようやく社會が自由になって一般のモンゴル人と交流が自由にできるようになって私はこの時期、今に続く大切な友を得た。馬頭琴をならったバトチョローン、作曲家のジャンノロブ、民主化のリーダーだったゾリグやソソルバラム。残念ながら故人になってしまった人も多い。1991年の6月に私が中心になって企画・実行した日本紹介綜合週間（ジャパン・フェスティバル）には、日本から200人以上の人が参加した。日本の歌のコンテストは「北國の春」だった。バトチョローンとカセット・テープに録音し、テレビ局やラジオ局、そして學校などに配って回った。一つの歌のコンテストに287人が参加した。審査は疲れたがモンゴル人の歌唱力の高さに感動し心地よい疲労感が残った。また、日本から来た参加者へのおにぎりを公邸で握ったことなどは、今日の大使館の活動としては考えられないことだった。また、現在との大きな違いは、この時期のモンゴルの若者は、自由を求めてモンゴルの將來に大きな夢や希望を有していたことだろう。市場經濟化と民主化は、私はモンゴルの發展のためのキーワードだと今でも確信しているが、最近は、間違った自由や、自由の乱用、自己中心的な考えの人が増えたように思えるのは残念である。

日本のODAで裏話をしよう。私が89年の3月にカナダのオタワから引越し荷物を航空便で北京に送ってUBで待っていたが届かない。結局5か月もかかって到着した。理由を調べてみると、積み替え基地のある二連でモンゴル行きが膨大な量滞貨していることがわかった。これがモンゴル国内に積み替え基地を造るというプロジェクトを必死で応援した理由である。完成後は日本からも2週間から1か月で荷物が届くようになった。また、

インテルサットの地上局を建設することになった経緯は面白い。私達現場にいるものにとって日本との通信が自由にできないことは不便極まりないことだった。何度も地上局の建設を意見具申したが外務本省は冷たかった。

90年代の初め、外務省の無償資金協力課長がモンゴルに来て、ゴビに視察に行ったが、砂嵐にあい首都に帰って来れなかった。課長には、UBから北京経由でアフリカへの出張の予定が組まれていた。課長は「直ちに、本省と関係する大使館に電話してくれ」と必死で訴えてきたが、「つながりません」というしかなかった。結果、課長から「帰ったら地上局案件をすぐ動かす」という言質を得た。こうしてインテルサット地上局の建設が決定した。衛星地上局も積み替え基地の建設もモンゴルの経済安全保障に極めて意義があるものだと思う。ODAはモンゴルの発展のために、モンゴル国民のためになるものでなければならぬ。日本のモンゴル支援の基本的な精神だと思うが、実現の背景にはこうした裏話もあったのである。

海部総理は1991年6月のロンドンサミットでモンゴル支援に言及した。直後の8月サミット国のリーダーとしては初めてモンゴルを訪問し、モンゴル支援国国際会合を日本で開催することなど積極的支援策を発表した。米国のベーカー国務長官がモンゴルの民主化に関心を持ち、日本が指導的役割を果たすことを求めたこともあり、日本の積極的支援政策に誰も文句がなかった。支援国会合の時に私も長官から声をかけていただき感動したことを覚えている。以来、日本はモンゴル支援の先頭に立ってきた。

4. ワシントンからモンゴルへの転勤

2001年の9.11事件では、米国の日本大使館の領事部長として日本人の保護活動に明け暮れた。深夜まで救急車のサイレンが鳴り響いて寝付かれなかった日々が昨日のようだが、もう20年が過ぎた。2002年に第3回目のモンゴル赴任をした時には、モンゴルは別の国になっていた。外国からの投資も入ってきて、鉱山開発も進みつつあり、90年代の暗さはなくなっていた。私は、第2回目について大使館のナンバー2として赴任した。この時期の私の大使館での活動は、「国づくりは人づくりから」をモットーに教育に力をいれた。特に、地方の学校をまわり、屋根に木が生えていたり、ガラスが割れ紙を貼っていたり、カビだらけになっている学校が実はたくさんあった。そういうところを実際自分の目で見て、かたっぱしから「草の根無償資金協力」で改修していった。当時は、次席の私と、現地職員 of チンゾリグだけでも、実に多くの案件を形成した。モンゴルの草の根案件が多いこともあって、その後本省は草の根担当専門の現地スタッフを3人にしてくれた。

この時期の忘れられないODAの思い出は、太陽道路である。日本が様々な援助をしているが、どれだけの人が、日本がやったと覚えていてくれるだろうか。日本国民の労働の汗

である税金が使われている以上記憶に残すべきだ。そう考えてウランバートル市役所の道路局に相談にいったら、後日20ぐらいの道路に名前を付ける案が送られてきた。その一つであった「太陽道路」を躊躇なく選んだ。その後、日本が陸橋を作った時には「太陽橋」と名付けられた。私が、大使時代に心血を注いで推進した「教育病院」も当時の教育大臣とは「太陽病院」と呼ぼうと約束をしていたが、その後私も、大臣も代わり、「太陽」主義がなくなってしまったことは寂しい限りである。

5. 大使としての活動と思い出

東京でユネスコを担当する室長をやっていた時に、ボコバ事務局長を招待することができた。また、彼女がモンゴルを訪問することも知った。日本はユネスコに人材支援日本基金、無形文化財保存日本基金をもっていたので、モンゴルの博物館の人材強化プログラムを提案し実現した。モンゴルに赴任する前に決まったのでモンゴルへの手土産の形になった。私は、カブールの国立博物館に書かれている“A nation stays alive when its culture stays alive”という言葉の信奉者である。民族の伝統や文化を尊重し、保護できない政治家は真の愛国者ではないと思っている。

2011年モンゴルの経済成長率は世界でもトップクラスだった。私が赴任する前にはたくさん日本の大企業の幹部が挨拶に来られたが、その後数年でモンゴルへの関心とモンゴルの信用は急落した。政府の入札の取り消し、外国投資への圧力等外国投資家のモンゴルへの熱は冷めてしまった。

着任早々難題続きであった。TT鉄道の国際入札に日本が不自然な形で排除されたり、第5火力発電所の入札が流れてしまったり、モンゴル政府の入札への不信感が高まった時期であった。また、新ウランバートル国際空港も供与を約束した額では対応できず、追加借款を受けるかどうか、日本としては追加借款を供与すべきかどうかの問題になり、解決に奔走した。医科大学付属教育病院は、医師の養成を行うためには学生の時から臨床経験を積むことが重要であるとの考えで推進したが、植物園の反対運動をはじめ場所をめぐる問題でもめた。バトウル市長の協力がなかったら実現できなかったかも知れない。ガントゥムル大臣が日本の高専卒業者で教育に理解があったので、教育病院も1000人の工学系人材育成支援円借款もできたと感謝している。日本企業の70歳を過ぎた現地社長がマリファナ疑惑で1か月も拘禁されるという冤罪事件もしたてられ、事件の解決に腐心した。このように大使時代には、難しい案件の実現のため奔走することが多かった。こうした多くの難題を乗り越えられたのも、日本の外務省や官邸の中の、モンゴルファンや私を応援して下さった方々、そしてモンゴル側の支援者のおかげに他ならない。

私は若い時に条約局の法規課というところで勤務したことがある。課員は庶務や会計担

当を入れてもわずか12、3人という小さな課だった。そこには、法務省、防衛省からの出向者もいた。この中から、ロシア大使を経て皇太子殿下(今の天皇陛下)の東宮侍従になった人、外務次官を経て内閣国家安全保障局長になった人、最高裁判所の長官になった人、防衛事務次官になった人など多くの優秀な国家公務員がいた。その中で、3人までがモンゴルの地を踏んでくれて私の仕事を応援してくれた。感謝しかないが、人は、こうしたつながりが大切だということは、モンゴルでも何度も経験した。モンゴル語の「タニルテイフン タリンチネー、タニルグイフン アルギンチネー」という言葉の大切さを噛みしめている。

大使時代の最大の思い出は、在任中に安部総理が3回もモンゴルを訪問されたことだ。大使としては日本の総理をお迎えできることは名誉であり、総理の訪問で両国関係は一層緊密になる。そのような貴重かつ重要な経験をさせていただいたことから、日本大使としての在任期間が5年に及んだ。個別の名前は出さないがモンゴルの歴代大統領、首相、大臣以下官僚の人たちとも「いい仕事」ができたことに感謝する。特に、私は率直に悪いものは悪いと申しあげる性格であり、誤解を受けることもあるが、モンゴルの本当の発展を望むものは、課題が何かを正確に把握する必要があると信じている。

6. モンゴルと日本の関係者への感謝

私は、モンゴルが発展するためには、自由、民主主義を堅持し、ソドノム元首相が言っていたように国民が団結していくことが大切だと信じている。自分が一生をかけてかかわった国、モンゴルが繁栄してほしいし、人々が豊かになってほしい。貧困は独裁や政治の腐敗をもたらすことは、私が大使を辞める時に「モンゴルの人たちへのメッセージ」で書いたとおりである。日本とモンゴルとの関係の多くに関り、最初に赴任した1977年と今日の違いを見て、これほど嬉しいことはない。「豹は死して皮を残す、人は死して名を残す」という言葉がある。自分がやったことが、どこかで、誰かの記憶に残っていることを祈りたい。

私は、本省での五年余のモンゴル担当に加えて4回のモンゴル勤務をあわせると、外務省人生の半分をモンゴルと直接関わった。この間に実に多くのモンゴルのリーダーたちと仕事をした。歴代大統領や首相の人たちとモンゴルの発展のために、モンゴルの国家利益を守るためにたくさんのいい仕事ができたと信じている。今、前任者たちを追求し、逮捕したりということが日常的になって、これらの人たちの評価も二分される時代になった。しかし幸いに、両国の関係は極めて良好である。願わくば、もう少し、経済的な関係が発展することが必要だが、モンゴル人はもともと優秀な人が多く教育に力を入れれば、必ず道は開けると信じている。また、中国の台頭と中国への経済的な依存という新たな国際関係の中で日本がモンゴルとの関係を強化することができるか課題も出てきているが、モンゴ

ルにおける民主主義の質に変更が起きないことが極めて重要である。なぜ、ウクライナが世界中から同情され支持を得られているか。それは私達と同じ理念に生きる人々が迫害されているからに他ならない。

最後に、この紙面をお借りし、これまで日本・モンゴルの関係発展に意を尽くしてくれたすべての友好諸団体及び両国国民の皆様方にお礼を申し上げたい。両国の関係が次なる半世紀に更なる発展を遂げることを祈念します。

(元モンゴル駐箚特命全権大使)